

SIMガイドライン7ステップにおける生成AI活用の現状・課題・可能性（N=42）

評価とIMMにおける生成AI活用状況に関するアンケート 結果報告書【改訂版】

～ アンケート調査から読み解く、実務における生成AI活用の現状・課題・可能性 ～

2026年8月 改訂版 v2.1

伊藤 泰久^{*1}, 長井 英之^{*2}, 千葉 直紀^{*3}

^{*1}: 認定NPO法人 全国子ども食堂支援センター・むすびえ

^{*2}: 一般社団法人オープンデータラボ

^{*3}: 一般財団法人 社会的インパクト・マネジメント・イニシアチブ

本報告書について

初回集計（N=32）の発表内容を、**追加募集分を含む全42件（N=42）**で再集計した改訂版である。

01

本調査の初回集計結果（N=32）は、2026年6月17日開催のSocial Impact Day 2026（SID2026）Session 4にて発表した。

02

セッション後、著者および著者と関連する組織へ追加の回答募集を行い、10件の回答を得た。本報告書は、追加募集分を含む全42件（N=42）で再集計した改訂版である。

03

初回報告はセッションでの投影・口頭説明を前提とした資料であったのに対し、本改訂版は読んで理解いただくことを想定し、各所に所見を加えた詳細版として構成している。

※ 追加募集は無作為抽出ではないため、本報告書の数値は回答者集団の記述統計として読みたい（詳細は付録「統計的留意事項」）。

目次

本報告書について	2	02 課題を知る	19
01 現状を知る	5	● 実践者が直面する課題の全体像－6つの論点	20
● 調査の設計－SIMの実践7ステップに沿って	6	● 課題①～⑥を深掘り	21–23
● 回答者の顔ぶれ	7	● 現場に息づく、実践者の工夫－6つの型	24–26
● 利用の全体像	8	03 可能性を考える	27
● 7ステップ別 AI活用率	9	● AIとの共創が拓く、6つの可能性	28
● 7ステップ活用状況サマリー	10	● 可能性①～⑥を深掘り	29–30
● 結果の頑健性	11	● クロージング	31
● 追加回答者（N=10）の特徴	12	付録	32
● 立場別の活用率（ヒートマップ）	13	● STEP 1～7 全選択肢の集計結果	33–39
● 立場別の詳細（資金提供者／評価・コンサル／中間支援／事業者）	14–17	● 回答者属性・利用ツール 全数値	40
● 7ステップを貫く、4つの用途テーマ	18	● 統計的留意事項	41

SIMの7ステップで、生成AIは どこまで使われているのか？

① 現状を知る

アンケート調査から

利用ツールと、7ステップ別の活用率・状況を実データで把握する。

② 課題を知る

実践者が感じる不安・困りごと

再現性・セキュリティ・過剰依存・当事者性。自由記述の「生の声」から。

③ 可能性を考える

期待の声と、AI時代の設計論

効率化の先で、人間が担う「価値判断・合意形成」をどう設計し直すか。

01

現状を知る

アンケート調査から、生成AIの利用実態とSIM 7ステップ別の活用率を読み解く。

● ① 現状を知る

調査の設計 — SIMの実践7ステップに沿って

「評価とIMM」の現場で、生成AIがどの段階で／何に使われているかを、ガイドラインの実践ステップに対応づけて調査。



有効回答数

N = 42

無記名回答

調査期間

初回：2026/5/12 – 6/7 (N=32)

追加募集：2026/6/17 – 7/30 (N=10)

対象

SIM/IMM・評価に関わる多様な実務者

※ 追加募集は著者および関連組織への個別依頼によるもので、初回と募集経路が異なる。

参考：社会的インパクト・マネジメント・ガイドライン（Ver.2）6章 社会的インパクト・マネジメントの実践ステップ

● ① 現状を知る

回答者の顔ぶれ

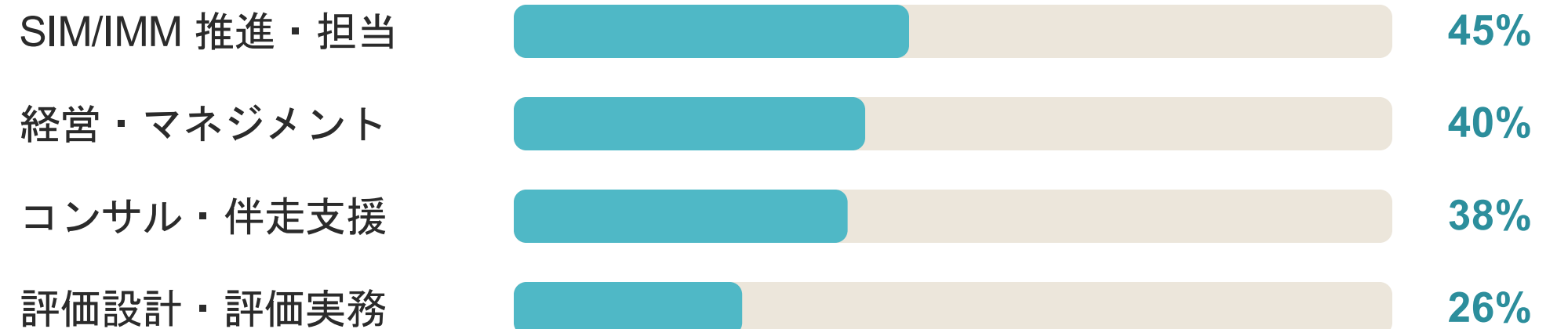
事業者・資金提供者・評価/支援機関がほぼ三分する構成。SIM/IMMの推進・調整に関わる層が広く回答。

所属の内訳（N=42）



- 資金提供者（財団・助成・金融）
- 評価・コンサル・中間支援
- 事業者（営利・非営利）
- 行政・研究・フリーランス 他

主な役割（複数選択・上位）



所見

初回（N=32）では資金提供者が最大セグメントだったが、追加募集で事業者が8名増え、事業者・資金提供者・評価/支援機関がほぼ三分する構成となった。立場ごとの比較がより実用的な解像度になっている。

● ① 現状を知る

利用の全体像 — もう「お試し」ではない

ほぼ全員が業務で生成AIを利用し、その9割近くが有料版を契約。日常の実務に組み込まれている。

97.6%

が業務で生成AIを利用

41 / 42 名

85.7%

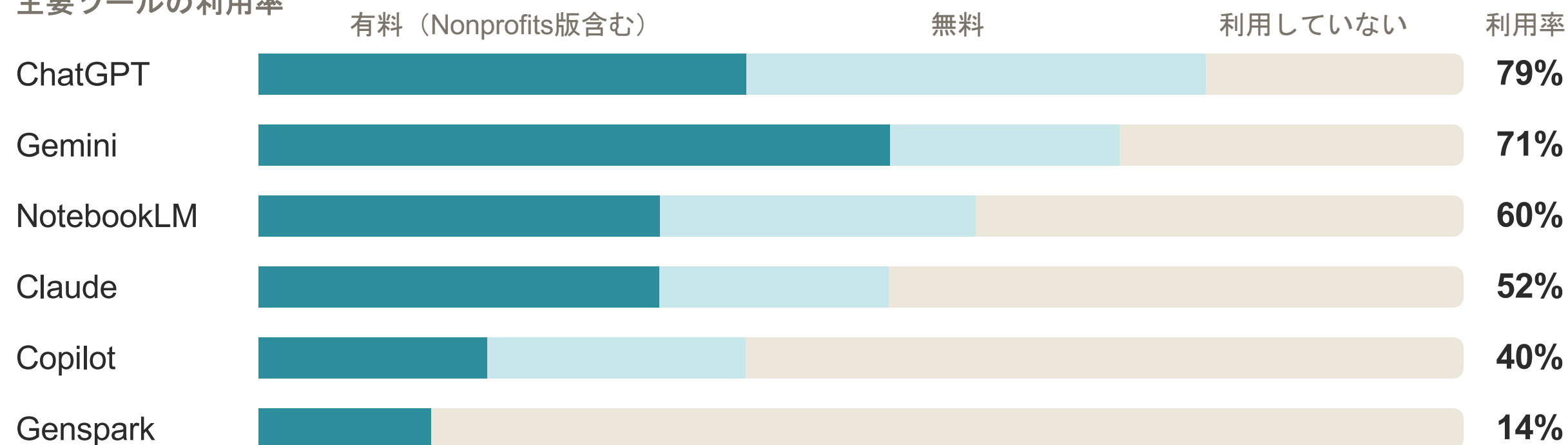
が有料版／Nonprofits版を契約

36 / 42 名

4.7 / 7

ステップ平均で活用（広く縦断）

主要ツールの利用率



その他：Canva AI・Perplexity・Notion AI・Napkin AI・Notta・Plaud など、用途特化ツールも併用。

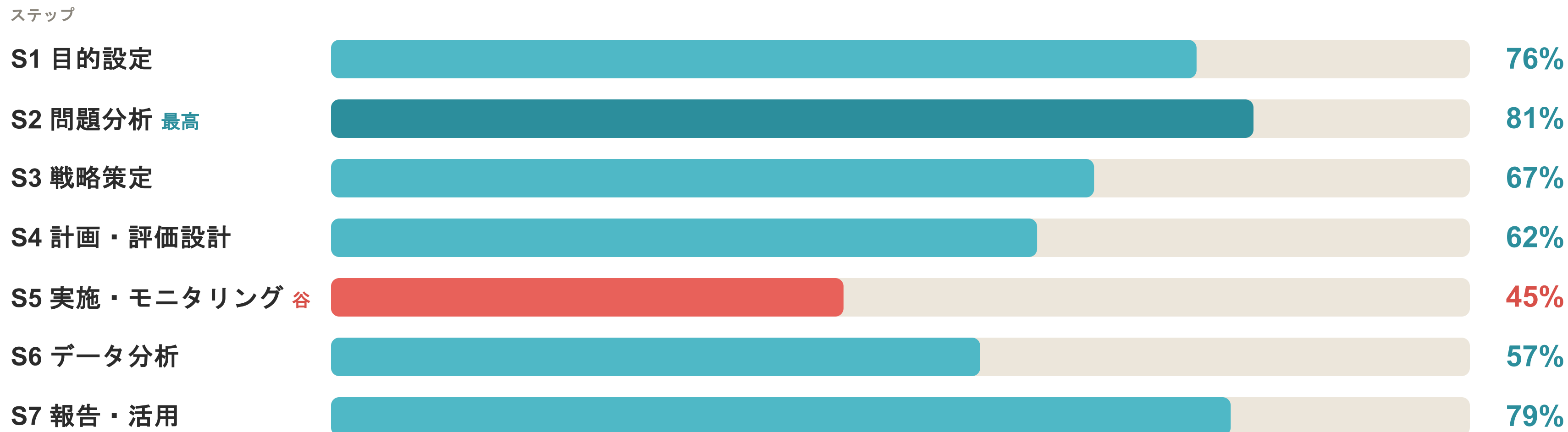
所見

利用率・有料契約率とも初回とほぼ同水準で、生成AIが既に業務の標準装備となっている実態を追認した。ツールの利用順位は6サービスとも初回から不変である。

● ① 現状を知る

7ステップ別 AI活用率 — 明暗が分かれる

計画の前半（S1–S2）と報告（S7）で高く、**現場のモニタリング（S5）が最大の谷**に。



所見

「S2 問題分析が最高、S5 実施・モニタリングが谷」という構造は初回から不変。一方でS7 報告・活用は初回（N=32）の72%から79%へ上昇し、S1 目的設定と並ぶ上位となった。計画前半と報告での活用が厚く、現場のモニタリングが薄いという全体像は変わらない。

7ステップ活用状況サマリーー どこで・何に使われているか

計画の前半（S1–S2）と報告（S7）で高く、**現場のモニタリング（S5）が谷**。用途は「調べる・組み立てる・整える」に集約。

ステップ	活用率	主な用途（上位3項目／選択率）	示唆
S1 目的設定	76%	組織・事業特性の整理(62%)、ブレスト(57%)、文献・先行事例調査(52%)	価値判断・言語化は人間（ミッション化は29%）
S2 問題分析	81%	先行研究・エビデンス整理(60%)、社会課題データ(52%)、文字起こし分析(50%)	最高値。質的データの一次整理に強み
S3 戦略策定	67%	ロジックモデル作成(50%)、IOO・アウトカム設定(36%)、因果連鎖の構築(33%)	壁打ち相手としての利用が広がる（S3内では引き続き1位）
S4 計画・評価設計	62%	評価指標KPI設定(45%)、アウトカム指標設定(40%)、アンケート設計(40%)	指標設定を後押し。評価デザイン選定は人間
S5 実施・運営	45%	WS・ファシリ支援(26%)、現場の声の収集(19%)、アウトプット収集(17%)	最大の谷。日常運営の「お作法」は未開拓。事業者では進捗・予算管理での利用が始まりつつある（参考値）。
S6 データ分析	57%	集計・要約・グループ化(50%)、可視化(31%)、定性コーディング(26%)	集計・可視化が中心。統計・因果推論は低水準
S7 報告・活用	79%	報告書の文言・表現調整(64%)、スライド作成(45%)、レポート原案(43%)	文章の研磨と資料化に絶大。対話準備を加速

結果の頑健性 — 回答者構成が変わっても、全体傾向は動かなかった

追加10名で回答者構成は**有意に変化**したが、7ステップ活用率もツール利用順位も**ほぼ動かなかった**。

変わったこと

- 事業者比率 19% → 33%

追加募集により回答者構成が有意に変化（Fisher $p=0.001$, FDR $q=0.040$ ）。

- 追加10名の8割が事業者

内訳は事業者（非営利）5・事業者（営利）3・中間支援1・フリーランス1。

- 資金提供者・評価コンサル機関の追加はゼロ

両セグメントの数値は初回から1つも変わっていない。

変わらなかったこと

- 7ステップ活用率は全ステップで ± 2 pt以内

FDR補正後に有意なステップはゼロ（min $q=0.60$ ）。

- ツール利用順位は6サービスとも不変

ChatGPT > Gemini > NotebookLM > Claude > Copilot > Genspark。

- 「S2最高・S5谷」の構造も不変

計画前半と報告が厚く、現場のモニタリングが薄い像は維持。

所見

属性構成が大きく変わったにもかかわらず主要な結果がほぼ動かなかったことは、初回報告の知見が特定の回答者構成に依存しない、頑健なものであることを示唆する。ただしN=10の追加群で検出できる差には限界があり、「差が検出されなかった」ことは「差がないことの証明」ではない（付録「統計的留意事項」参照）。

追加回答者（N=10）の特徴－事業者の現場から

追加募集で得られた10件は**8割が事業者**。S5 実施・モニタリングで**運用系用途の萌芽**が見える。

① 内訳

事業者（非営利）	5名
事業者（営利）	3名
中間支援組織	1名
フリーランス	1名

資金提供者・評価コンサル機関からの追加回答はゼロ。

② S5で運用系用途の萌芽

プロセス管理・進捗管理	40%
予算・リソース管理の支援	40%

全体（N=42）ではそれぞれ14%・12%。実施フェーズの運用管理でAIを使い始めた層が含まれる。

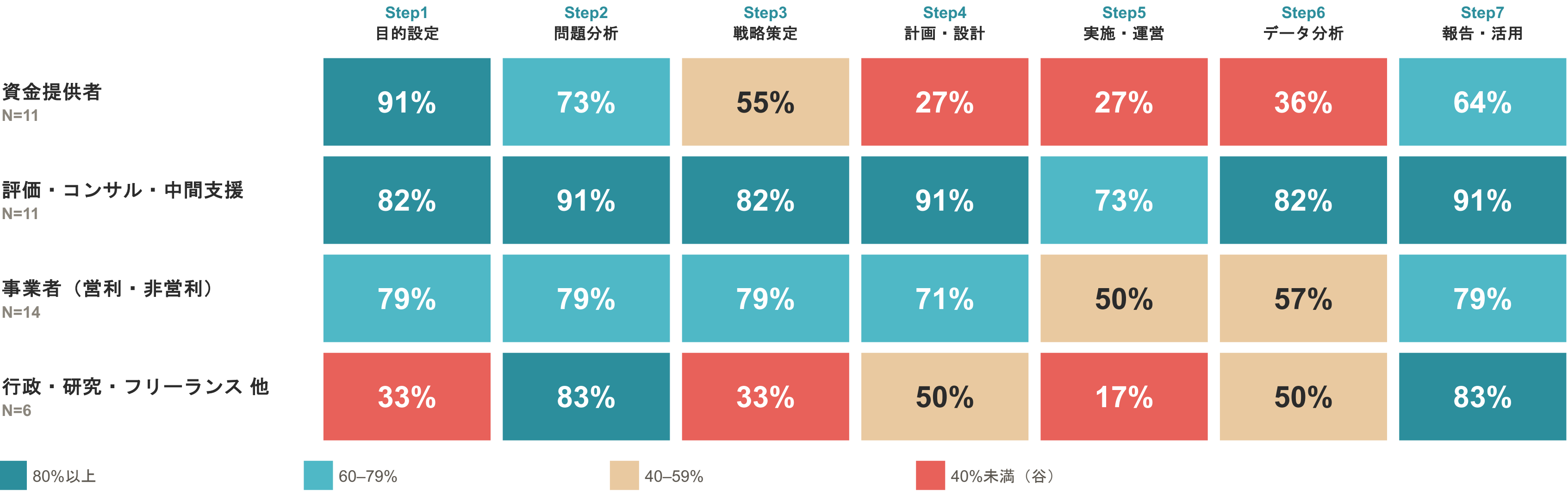
③ 自由記述から

AIの問題分析が社会課題の全体像や副作用を捉え損ねるリスクへの指摘が寄せられた（→ 課題編「課題③④」に収録）。

※ N=10の内数であり参考値。

立場別の活用率 — 「使う深さ」が立場で分かれる

資金提供者は**構想と報告に偏り**、評価・コンサル・中間支援は**ほぼ全ステップをフル活用**。共通する谷はS5。



所見

使う深さは立場で分かれる。資金提供者は構想（S1）と報告（S7）に偏り中盤が空洞、評価・支援側はほぼ全ステップをフル活用、事業者は計画と報告で高く実施・分析が谷。全立場に共通する谷はS5である。

資金提供者 — 構想と報告に集中、設計～分析の中盤が空洞

7ステップ
活用率 N=11

Step1
91%

Step2
73%

Step3
55%

Step4
27%

Step5
27%

Step6
36%

Step7
64%

どのステップで・何に使っているか

S1 目的設定 91% / S2 問題分析 73%

文献・先行事例の調査、組織課題の整理、社会課題データ・エビデンスの収集に活用。

S7 報告・活用 64%

報告書の文言調整、改善・学びの文書化、外部公開ドキュメントの作成。

谷：S4 計画設計～S6 分析（27～36%）

指標設計・データ分析の実装は手薄。中盤は人手に委ねられている。

課題感 — 人間が担う領域

- 著作権・知財・機密情報への強い懸念（「使いたくない」層も存在）
- 正確性は人の目で確認が前提。AIの性能差が「資金力格差」を生む懸念

「データの正確性には懸念があることを前提に、抽出された情報を人の目で確認したうえで採用・不採用を判断している」

— 資金提供者（Q4-2）

SIMIの枠組みでの含意：S1「AIが目的を規定しない／当事者視点の排除防止」。価値判断・審査を担う立場ゆえ、上流と出口に限定し慎重に使う姿が活用率にも表れる。

評価・コンサル・調査機関 — 設計から分析・報告まで縦断するヘビーユーザー

7ステップ
活用率 N=6

Step1
83%

Step2
83%

Step3
100%

Step4
100%

Step5
83%

Step6
83%

Step7
83%

どのステップで・何に使っているか

S3 戦略 100% / S4 計画 100%（全員）

ロジックモデル作成、KPI・アウトカム指標の設計、アンケート設計まで活用。

S2 問題分析 83%

インタビュー文字起こし分析、自由記述の整理、因果関係図の作成支援。

S6 分析～S7 報告 83%

集計・要約、定性コーディング、可視化、レポート作成まで一気通貫。

課題感 — 人間が担う領域

- 流暢な出力への過信、「AIに引っ張られる」リスク
- 文脈・質感の見極めと、現場との「往還」が不可欠

「AIが優秀すぎて、AIに引っ張られて、つい無理のある設計やデータ分析に持っていかれがちです」

— 評価・調査機関（Q4-2）

SIMIの枠組みでの含意：S6「現場感覚との突合・再解釈／相関と因果の混同防止」。使い込むほど、人間による検証・再解釈の比重が増す。

中間支援組織 — 分析・報告まで踏み込む実装志向

7ステップ
活用率 N=5

S1
80%

S2
100%

S3
60%

S4
80%

S5
60%

S6
80%

S7
100%

どのステップで・何に使っているか

S2 問題分析・S7 報告・活用が全員100%

問題分析から計画・分析・報告まで、後半の実装フェーズで深く活用。S1・S4・S6も80%。

S2 ニーズ分析 / S6 可視化・効果検証

受益者ニーズ分析、文字起こし、データ可視化・効果検証まで。

S7 報告 100%

インパクトレポート、スライド、インフォグラフィック作成。

課題感 — 人間が担う領域

- ハルシネーション、関係者の合意形成・当事者の声の反映
- 外部監査・人材育成・費用負担など「組織・制度」の論点まで

「SIM/IMMを行う際にAIをどこまで使うかという事前合意ができることが望ましい。価値判断は関係者参加型で」

— 中間支援組織（Q4-4）

※ N=5のため参考値。

SIMIの枠組みでの含意：S7「成果誇張の防止／当事者の声を代作しない／合意形成」。深く使う立場ほど、制度設計とガバナンスの論点に自覚的。

事業者（営利・非営利）－計画づくりと報告で高く、実施・分析の中盤が谷

7ステップ
活用率 N=14

S1
79%

S2
79%

S3
79%

S4
71%

S5
50%

S6
57%

S7
79%

どのステップで・何に使っているか

前半の計画づくり（S1～S3 79%）と報告（S7 79%）で高い
自社の事業設計フェーズから報告資料づくりまで、幅広く活用。

S3 戦略 / S4 計画

ロジック・因果連鎖の構築、アウトカム・KPI指標の設計。

中盤の実施（S5 50%）・分析（S6 57%）が相対的に谷

初回N=6で見た「後半S5～S7全般の低下」は、サンプルの偏りによる見かけだった可能性が高い。

課題感－人間が担う領域

- 誤情報の確認工数、エビデンス・データの正確性
- インパクトの妥当性・正当性の判断、機密情報の管理

「ロジックモデル作成時に、人間が意図していない・想定していないインパクトパスウェイに気づかせてくれる」（期待の声）

― 事業者（営利）（Q4-3）

SIMIの枠組みでの含意：計画と報告ではAI活用が浸透する一方、実施・分析の中盤は人間が担う。実装フェーズの「お作法」づくりが次の課題となる。

● ① 現状を知る

7ステップを貫く、4つの用途テーマ

個々のステップを越えて、AIは大きく**4つの仕事**に集約される。

A 背景リサーチ・先行知見の整理

調査負担を下げ、初期の「見取り図」を描く。

課題定義 **S1 62%** / 文献調査 **S1 52%**

B ロジック構築・指標設計の壁打ち

因果連鎖の定義や難所の指標決定に伴走。

ロジックモデル **S3 50%** / 評価指標 **S4 45%**

C 質的データの一次整理・要約

現場の生の声・文字起こしの仕分けを高速化。

文字起こし分析 **S2 50%** / 集計要約 **S6 50%**

D 報告・公開ドキュメントの研磨

説明責任のための表現調整と資料化。

文言調整 **S7 64%** / スライド作成 **S7 45%**

02

課題を知る

便利さの裏側で、実践者は何に不安を抱いているのか。
自由記述の「生の声」から。

■ ② 課題を知る

実践者が直面する課題の全体像－6つの論点

自由記述（Q4-2・Q4-4）から抽出。①～④は従来の「4つの不安」、⑤⑥は設問を横断して浮かんだ論点。次ページ以降で各論点の「生の声」を深掘りする。

① 非決定性・再現性とアシュアランス※

同じ入力でも出力が再現しないという「非決定性」。社会的評価の保証（アシュアランス）にどこまで耐えうるのか、どの程度の精度が必要かが定まらず、ツール化の障壁にもなっている。

② 機密・個人情報・権利の取り扱い

センシティブなデータを入力してよいか、著作権・知財が未解決ではないか。組織ルールが未整備な中、有料版限定・固有名詞の伏字・外部監査の要否など、各自が手探りで対応している。

③ 流暢な成果物への過信と人間の関与

文章も図表も「綺麗に」仕上がるため、批判的な検討を経ずに採用されやすい。AIに引っ張られて無理な設計に流される危うさもあり、最後は人間が見極める姿勢が問われる。

④ 文脈・当事者性・質的データの本質

質的データは文脈が命。AIの要約やコーディングには解釈が混じるため、当事者の声や現場の固有文脈が削ぎ落とされやすく、文脈に照らした「往還」のプロセスが欠かせない。

⑤ 情報の正確性・ハルシネーション・検証コスト

横断テーマ

自由記述で最も多く挙げた不安。事実の正確性やエビデンスの確かさへの懸念に加え、「誤りを確認する工数」そのものが新たな負担になっている。

⑥ 組織・制度・合意形成（ルール・人材・コスト）

横断テーマ

個人の不安を超える組織・制度の論点。利用範囲の事前合意、関係者参加型の価値判断、人材育成・費用負担・外部監査、そしてAIの性能差が生む資金力格差まで視野に入る。

※アシュアランス：報告された情報が信頼できることを、第三者が独立した立場で検証・保証すること。

課題①②を深掘りー再現性・保証／機密・個人情報・権利

P17 全体像 ① に対応（旧「4つの不安」①）

① 非決定性・再現性とアシュアランス※

同じ入力でも出力が再現しないため、社会的評価の「保証」に耐えうるかが問われる。国際的にも基準が議論中で、後から基準が整理されればやり直しが生じうる点や、ツール化の難しさも指摘された。

「生成AIを活用した場合、開示は可能だが、インプットとアウトプットが決定論的ではなく**再現性がない場合があるため、保証に耐えられるかが懸念**。後に保証基準で整理がされた際にやり直しが必要になる可能性がある」

— 行政・公的機関（Q4-2）

「生成AIのLLMの特性により、同じ作業を100%再現できないことがあるため、ツール化する場合に課題になる」

— フリーランス（Q4-2）

「インプットとアウトプットが決定論的ではなくAdaptiveであることにより、保証可能性・説明力について、どこまでの精度が必要かについてコンセンサスが必要」

— 行政・公的機関（Q4-4）

P17 全体像 ② に対応（旧「4つの不安」②）

② 機密・個人情報・権利の取り扱い

当事者のセンシティブなデータを入力してよいか、著作権・知財は大丈夫か。組織ルールが未整備な中、有料版限定・固有名詞の伏字といった自衛策や、開示の了承・外部監査の必要性まで声が及んだ。

「設定でセキュリティを事前に確認して設定。固有名詞はX等で表記。インタビューデータなどは有料版でしか使用しないようにしています」

— 評価・調査機関（Q4-2）

「脆弱な人々のデータを扱う際には特に、プライバシーの懸念を払拭する必要がある」

— 行政・公的機関（Q4-2）

「現行の生成AIは著作権など権利上の問題が十分に解決されていないとの認識であり、個人的には使用したくないと考えております」

— 資金提供者（Q4-2）

「データ開示に関する了承を得られるかどうかに関心を感じている。リクルートが採用している事例のように、**外部監査機関が必要ではないか**と感じている」

— 中間支援組織（Q4-2）

課題③④を深掘りー流暢さへの過信／文脈・当事者性

P17 全体像 ③ に対応（旧「4つの不安」③）

③ 流暢な成果物への過信と人間の関与

文章も図表も綺麗に仕上がるため、批判的検討を経ずに採用されやすい。AIに引っ張られ無理な設計に流される危うさもあり、出力を使いこなす人間側の力量と「見極め」が要るとの声が並んだ。

「文章も図表もプレゼン資料も非常に綺麗にできあがるため、そのまま採用される傾向があるが、批判的に受け取るようにしたい」

― 中間支援組織（Q4-2）

「AIが優秀すぎて、AIに引っ張られて、つい無理のある設計やデータ分析に持っていかれがちです」

― 評価・調査機関（Q4-2）

「生成AIで作成するのはドラフトであり、確認・検証のための人間の介在が必要だが、形ができることでそれにとどまってしまうかという懸念がある」

― フリーランス（Q4-2）

「AIで「正しいこと」「べき論」を吐き出してくれるかもしれないが、それが現場にフィットする質感・量感なのかはしっかり見極めていかなければならない」

― 評価・調査機関（Q4-4）

P17 全体像 ④ に対応（旧「4つの不安」④）

④ 文脈・当事者性・質的データの本質

質的データは文脈が命。AIの要約・コーディングには解釈が混じるため、文脈に照らした「往還」のプロセスは省けない。ロジックに乗らない感覚的・身体的な要素や、当事者の声の反映も論点に挙がった。

「質的データは文脈が重要で、要約やコーディングのプロセスには学習したAIによる解釈が含まれる。要約してもらっても、文脈に照らして往還するプロセスは挟むべきで、データの本質的な信憑性を落とさないようにしたい」

― 研究・教育機関（Q4-2）

「関係者からの表現や言葉などその文脈特有のものがあるので、AI分析を使っても、確認して行ったり来たりしながら進めたい」

― 評価・調査機関（Q4-2）

「ロジックだけではなく、感覚的なもの、身体的なものも重要な要素で、そこにおいては人間というものと向き合っていくことが必要なのかと感じています」

― フリーランス（Q4-4）

「乗り越えるべき課題は、情報の正確性、関係者間の合意形成、そして当事者の声の反映だと考える」

― 中間支援組織（Q4-4）

〔AIの問題分析がシステムの副作用・意図せざる帰結を捉え損ねるリスク〕

「社会課題について検証する際、全体像を掴めているかや、本質的な課題まで深く掘り込めているかに懸念がある（例えば、児童労働の本質的な問題は貧困だが、それを解決しないまま児童労働のみに焦点を当て根絶に動くと、家から工場に通うことができていた子どもたちが売り飛ばされるようになるなど）」

― 事業者（営利）（Q4-2）

課題⑤⑥を深掘りー正確性の検証／組織・制度・合意形成

横断テーマ（①と隣接するが「事実の正確性」は別軸）

⑤ 情報の正確性・ハルシネーション・検証コスト

自由記述で最も多く挙げた不安。出力の正確性やエビデンスの確かさへの懸念に加え、誤りを確認する工数そのものが負担になっている。多くが「人の目での確認」を前提に運用していると答えた。

「あくまで参考として活用するので、データの正確性には懸念があることを前提に、抽出された情報を人の目で確認したうえで採用・不採用を判断している」

― 資金提供者（Q4-2）

「困りごとは、データの正確性とハルシネーション」

― 中間支援組織（Q4-2）

「誤情報の確認工数が必要」

― 事業者（営利）（Q4-2）

「データの信頼性、現場での適応度合いが不安。まだ実務での活用はそこまで出来ておらず実感が無いため」

― 事業者（NPO）（Q4-2）

横断テーマ（個人の不安を超える組織論点）

⑥ 組織・制度・合意形成（ルール・人材・コスト）

個人の工夫を超えた、組織・制度の論点。利用範囲の事前合意や関係者参加型の価値判断、人材育成・費用負担・ツール選定、外部監査、そしてAIの性能差が生む資金力格差まで視野に入れる必要がある。

「SIM/IMMを行う際にAIをどこまで使うかという事前合意ができることが望ましい。また価値判断は、比較基準が明確化されているものも含めて、関係者参加型での判断がされることが重要だと思う」

― 中間支援組織（Q4-4）

「乗り越える課題は、情報の正確性、個人情報・機密情報の扱い、人材育成、費用負担、ツール選定」

― 中間支援組織（Q4-4）

「依頼主との関係づくりのあり方が変わってくるかもしれない。AIの性能差が顕著になると、資金力の差が響いてしまうかもしれない」

― 資金提供者（Q4-2）

「インパクトの社会的価値の大きさについて、その妥当性と正当性をどう判断するか」

― 事業者（営利）（Q4-4）

不安に向き合う、実践者の工夫－6つの型

自由記述（Q4-1）から抽出。なお「現在は使用していない」「特になし」「成功事例と呼べるものはまだない」との回答もあり、確立された成功事例は現時点では限定的。

01 記録・議事録の統合とトーン統一

複数人がそれぞれ取った会議・WSの議事録を読み込ませ、表記揺れを整えて1本のサマリーに統合する。乱立しがちな記録の整理に効く。

02 課題×マテリアリティの紐付け

関連する公官庁資料をAIに読み込ませ、社会課題を網羅的に抽出。自社のマテリアリティ別に整理・紐付けする土台づくりに活用。

03 会議録の「事前学習」活用

協働団体との会議を録音・学習させ、文脈を踏まえた下書きに。ロジックモデルや指標設定、レポート作成の場面で効いてくる。

04 たたき台・素案の高速生成

ロジックモデルや指標、レポートのたたき台を複数パターン瞬時に生成し、思考の出発点づくりを効率化。最終は人が仕上げる前提。

05 プロンプト設計＝壁打ち相手

出力の質はプロンプト次第。問いの精度を磨き、ステークホルダー整理や情報集約を助ける「壁打ち相手」として活用する。

06 速度と説明責任の両立

「どこまでAIに任せ、どこから人が検証するか」を線引き。AIとルールベースを使い分け、加速と説明責任を両立させる運用。

工夫01～03 を深掘り ― 記録の統合／課題の紐付け／事前学習

現場の知恵 全体像 01 に対応

01 記録・議事録の統合とトーン統一

複数人がそれぞれ記録した会議・WSの議事録はDocが乱立しがち。これらをまとめて読み込ませ、表記やトーンを整えて1本のサマリーに統合する使い方。

「インタビューや現地でのフォーカスグループやワークショップの記録を複数の人数で撮った場合、記録がDocで複数存在するので、それを**1本のサマリーに統一する、トーンを整える**など」

― 評価・調査機関（Q4-1）

現場の知恵 全体像 02 に対応

02 課題×マテリアリティの紐付け

自社のマテリアリティと社会課題を結びつける作業に活用。関連する公官庁資料をAIに読み込ませ、課題を網羅的に抽出してから整理・紐付けを行った。

「会社のマテリアリティと社会課題の紐づけのために、関連する公官庁の資料をAIに読み込ませて、**課題を網羅的に抽出し、マテリアリティ別に紐づけ**を行った」

― 資金提供者（Q4-1）

現場の知恵 全体像 03 に対応

03 会議録の「事前学習」活用

協働団体との会議を録音し、あらかじめAIに学習させておくことで、文脈を踏まえた下書きづくりに。ロジックモデルや指標設定、レポート作成の場面で効いてくる。

「協働団体とのミーティングもレコーディングし、ロジックモデルや指標設定、レポート作成時に**あらかじめAIに学ばせておく**と便利でした」

― 資金提供者（Q4-1）

工夫04～06 を深掘りーたたき台／プロンプト＝壁打ち／速度と責任

現場の知恵 全体像 04 に対応

04 たたき台・素案の高速生成

ロジックモデルや指標、レポートのたたき台を複数パターン瞬時に生成し、思考の出発点づくりを効率化。一方で、最終的には人が大幅に手を入れる前提との声も。

「たたき台のパターン作成の効率化」

― 事業者（営利）（Q4-1）

「レポートのレイアウト・デザインのニーズが高い。文章作成の素案をお願いするも、結局大幅に人が修正している状況」

― 資金提供者（Q4-1）

現場の知恵 全体像 05 に対応

05 プロンプト設計＝壁打ち相手

出力の質はプロンプト次第。問いの精度を高めることを工夫の核に置き、ステークホルダー整理や情報集約、思考を整理する「壁打ち相手」として活用している。

「プロンプトによって出てくるものがだいぶ違うので、**プロンプト設計は大事**だと思います」

― フリーランス（Q4-1）

「AIへの問いかけ（プロンプト）の精度を高めること」

― 中間支援組織（Q4-1）

「ステークホルダー整理や、様々な情報の集約、壁打ちくらいに活用しており、その範囲では助かっている」

― フリーランス（Q4-1）

現場の知恵 全体像 06 に対応

06 速度と説明責任の両立

「どこまでAIに任せ、どこから人が検証するか」を意識的に線引き。AIとルールベースを使い分け、作業を量・質ともに加速しつつ、説明責任が果たせる運用を志向する。

「AIなのか、ルールベースでの判断なのか、作業を量・質ともに加速しつつ**説明責任が果たせるライン**を検討するようにしている。作業速度は確実に上がっている」

― 中間支援組織（Q4-1）

「全ての業務にAIを使っている。AIによる得意、不得意があるので、それに応じて使い分ける工夫をしている」

― 事業者（非営利）（Q4-1）

03

可能性を考える

期待の声から見える、AIとの共創。そして効率化の先で人間が担う「設計」とは。

■ ③ 可能性を考える

AIとの共創が開く、6つの可能性

自由記述（Q4-3）から抽出。「急速に発展する技術に期待はしない」といった慎重な声もありつつ、多くがAIと人間の協働に可能性を見いだしている。

① IMMの「参入障壁」を下げる

知見・リソース不足という最大の壁をAIが補い、IMM/評価に挑戦できる団体・企業を増やす。測定にかけていた力を本来の事業へ振り向ける期待も。

② 気づけない「変化経路」の提示

人間だと気づけない抜け漏れの防止や、想定していなかったインパクトパスウェイ・因果連鎖への気づきを促す、伴走者としての役割。

③ 仮説構築・ロジック検証の加速

仮説を複数立てて収束させ、ロジックやアウトカム指標を検証する。思考の幅出しと絞り込みの両方を加速する使い方への期待。

④ AIと人間の「共創（co-creation）」

目的設定や価値判断といった最も人間的な営みを、AIと協働で磨く。評価とAIは相性がよく、共創の余地はまだ大きいとの声。

⑤ 「名人技」の民主化と知見の蓄積

属人的とされた名ファシリテーターの手法が誰でもアクセス可能に。成功事例やグローバルな議論が共有され、知見が積み上がる。

⑥ 「AIのお作法」とリスク管理の整備

セキュリティや正確性を、IMM固有のリスク管理を含む枠組みへ。リスク対応が内在化したツールと、人間側のリテラシー向上を期待。

可能性①～③を深掘りー参入障壁／変化経路／仮説・検証

可能性 全体像 ① に対応

① IMMの「参入障壁」を下げる

知見・リソース不足という最大の壁をAIが補い、IMM/評価に挑戦できる団体・企業を増やす。測定にかけていたリソースを本来の事業へ振り向ける期待も語られた。

「SIM/IMMに取り組む際の壁となっているであろう**「知見・リソース不足」の改善**につながること」
— 事業者（NPO）（Q4-3）

「AIを活用することでIMMに挑戦する企業が増えること」
— 事業者（営利）（Q4-3）

「インパクトを明らかにするためのリソースを、本来の事業に向けて
るためのリソースへと変えていくことができればよい」
— 中間支援組織（Q4-3）

可能性 全体像 ② に対応

② 気づけない「変化経路」の提示

人間が気づけない抜け漏れの防止や、想定していなかったインパクトパスウェイ・因果連鎖への気づきを促す。固定観念を超える提案役としての期待。

「人間だと気づけない抜け漏れの防止や、他のソリューション・ロジック・アウトカムの提案などができると有用だと思う」
— 資金提供者（Q4-3）

「ロジックモデルを作成する際に、人間が意図していない・想定していないインパクトパスウェイに気づかせてくれる」
— 事業者（営利）（Q4-3）

可能性 全体像 ③ に対応

③ 仮説構築・ロジック検証の加速

仮説を複数立てて収束させる、ロジックやアウトカム指標を検証する。思考の幅出しと絞り込みの両方を加速し、データベース化や文脈適合まで広がる期待。

「仮説構築を複数行ったり、収束させる点が活用できる部分だと思います」
— 事業者（営利）（Q4-3）

「ロジックの検証や、アウトカム・アウトカム指標の**データベース化および文脈適合化**などができるようになると、よりレベルが上がる気がします」
— 中間支援組織（Q4-3）

可能性④～⑥を深掘りー共創／名人技の民主化／お作法

可能性 全体像 ④ に対応

④ AIと人間の「共創（co-creation）」

目的設定や価値判断といった最も人間的な営みを、AIと協働で磨く。評価とAIは相性がよく、共創の余地はまだ大きいという前向きな声が並んだ。

「目的設定や価値判断など、AIと人間のco-creationができるようになると、より精度が高まると思います」
— 中間支援組織（Q4-3）

「まだまだAIとの共創余地が大きいと思うので、様々な事例が共有され、知見が積みあがっていくことを期待します」
— フリーランス（Q4-3）

「基本的に評価とAIは相性がいいと思います」
— 資金提供者（Q4-3）

可能性 全体像 ⑤ に対応

⑤ 「名人技」の民主化と知見の蓄積

属人的とされてきた名ファシリテーターの手法が誰でもアクセス可能に。成功事例やグローバルな議論が共有され、知見が積み上がっていくことへの期待。

「属人的と思われていた名ファシリテーターの手法などが誰でもアクセス可能になるなど、全体としての様々な試みが進んでいくとよいと思います」
— フリーランス（Q4-3）

「AIを活用した成功事例の共有に加えて、IMM特有のリスク管理も含めたフレームワークについてグローバルな議論の共有をいただけたらありがたい」
— 行政・公的機関（Q4-3）

可能性 全体像 ⑥ に対応

⑥ 「AIのお作法」とリスク管理の整備

セキュリティや正確性を、IMM固有のリスク管理を含む枠組みへ。リスク・課題への対応が一定内在化したツールと、人間側のリテラシー向上を期待する声。

「AI活用のお作法が成立するといいなと思っています」
— 評価・調査機関（Q4-3）

「人間のリテラシーを上げるとともに、生成AI自体のリスクや課題に対する対応が一定内在化したツールになっていくといい」
— フリーランス（Q4-3）

「正確性の向上（を期待したい）」
— 資金提供者（Q4-3）



効率化の先にある、人間が担う「設計」へ。

実務者の期待の声は、6つの可能性——IMMの参入障壁を下げる、気づけない変化経路への気づき、仮説・ロジック検証の加速、AIと人間の共創、名人技の民主化、AIのお作法の整備——に集約されます。生成AIは、効率化の道具にとどまらない広がりを見せ始めています。

一方で本調査が示した現状は、活用が「調べる・組み立てる・整える」に集中し、目的設定・価値判断・合意形成が人間の手に残っているという姿でした。効率化の先で問われるのは、**AIに何を委ね、人間が何を担うのか**という協働の「設計」です。

本報告書が、SIM/IMMに関わる皆さまとともにその設計を考えていくための、出発点となることを願っています。

付録

ステップ別 全選択肢の集計結果・統計的留意事項

各ステップの全選択肢の選択率（N=42／参考 N=32）、回答者属性・利用ツールの全数値、および統計的留意事項を収録。

目的設定

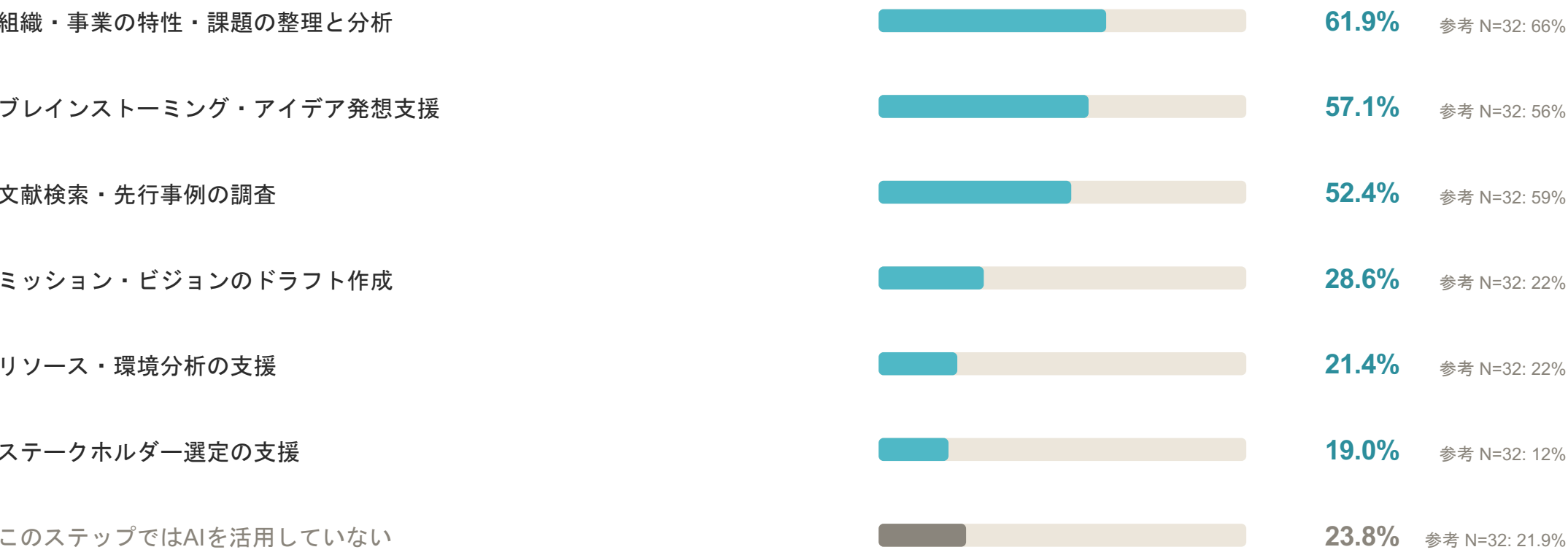
達成したい社会的変化を明確にし、活動の根拠を定義する段階。

76% がこの段階で
AIを活用

一方、ミッション・ビジョンの言語化（29%）は限定的。価値判断は人間が主導。

※ 活用率は本選択肢以外を1つ以上選んだ人の割合。同時選択の矛盾回答があるため、「このステップではAIを活用していない」の生選択数と補数は一致しない。

活用されている内容（全選択肢・選択率降順／N=42）



問題分析

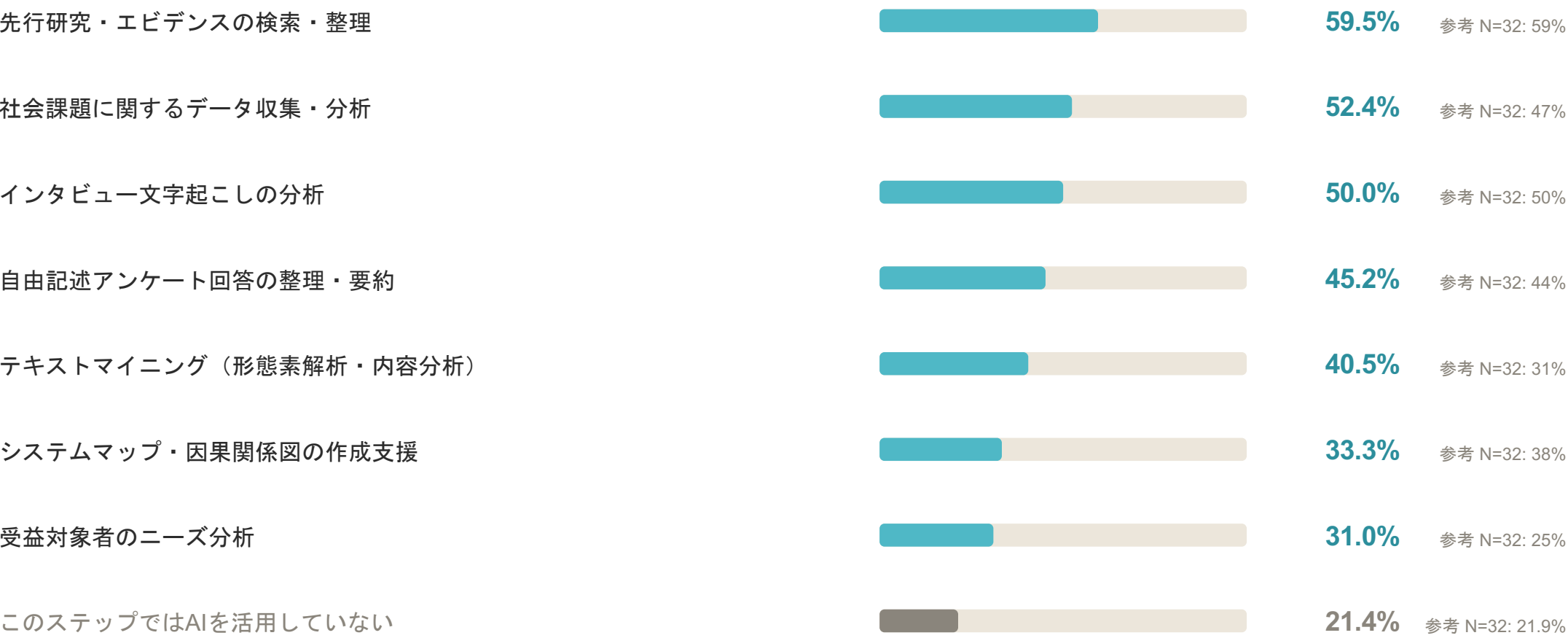
社会課題の実態と受益者のニーズ・原因を深く理解する段階。

81% がこの段階で AI を活用（最高）

質的データの一次的な整理・要約に強み。膨大なテキスト処理を高速化。

※ 注記はSTEP1参照。

活用されている内容（全選択肢・選択率降順／N=42）



戦略策定

課題解決の道筋（ロジックモデル）を設計し、活動計画を立てる段階。

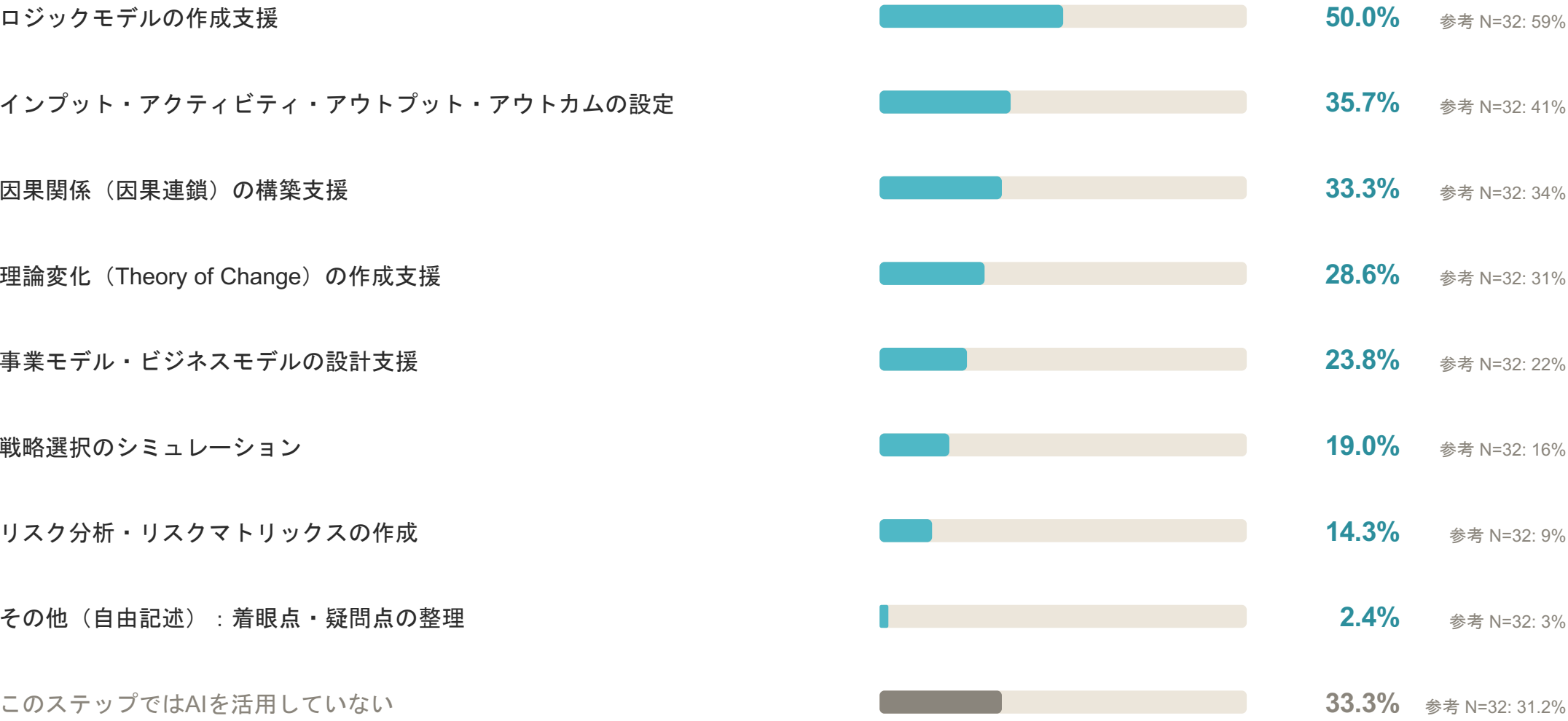
67%

がこの段階で
AIを活用

ロジックモデル作成が壁打ち相手として広がる（S3内では引き続き1位・50%）。

※ 注記はSTEP1参照。

活用されている内容（全選択肢・選択率降順／N=42）



計画・評価設計

「成功」をどう測るか、評価指標（KPI）と収集方法を計画する段階。

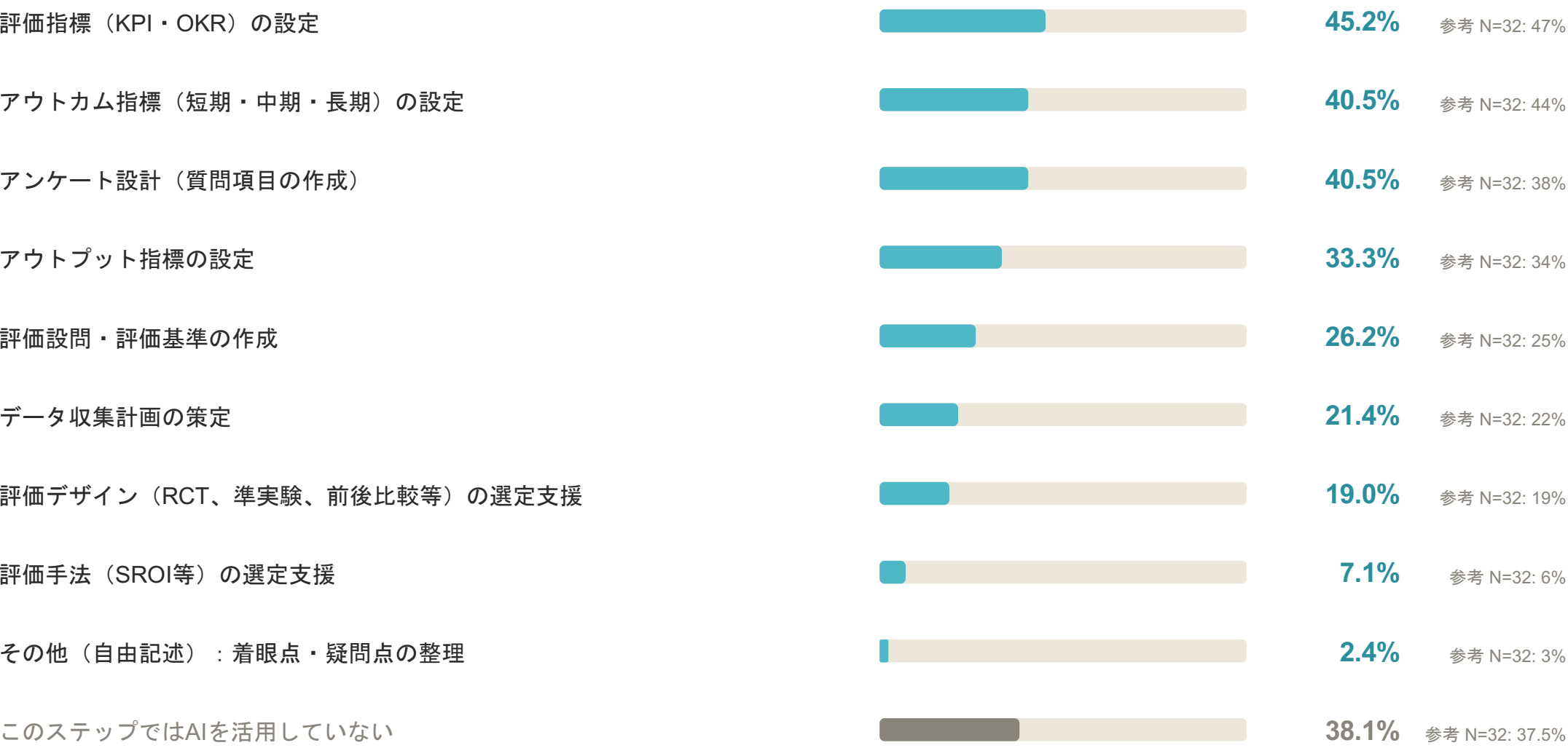
62%

がこの段階で
AIを活用

難所の指標設定を後押し。一方で評価デザインの選定（19%）は人間が担う。

※ 注記はSTEP1参照。

活用されている内容（全選択肢・選択率降順／N=42）



実施・モニタリング

計画通り活動を実施し、進捗・リソースを確認しながら調整する段階。

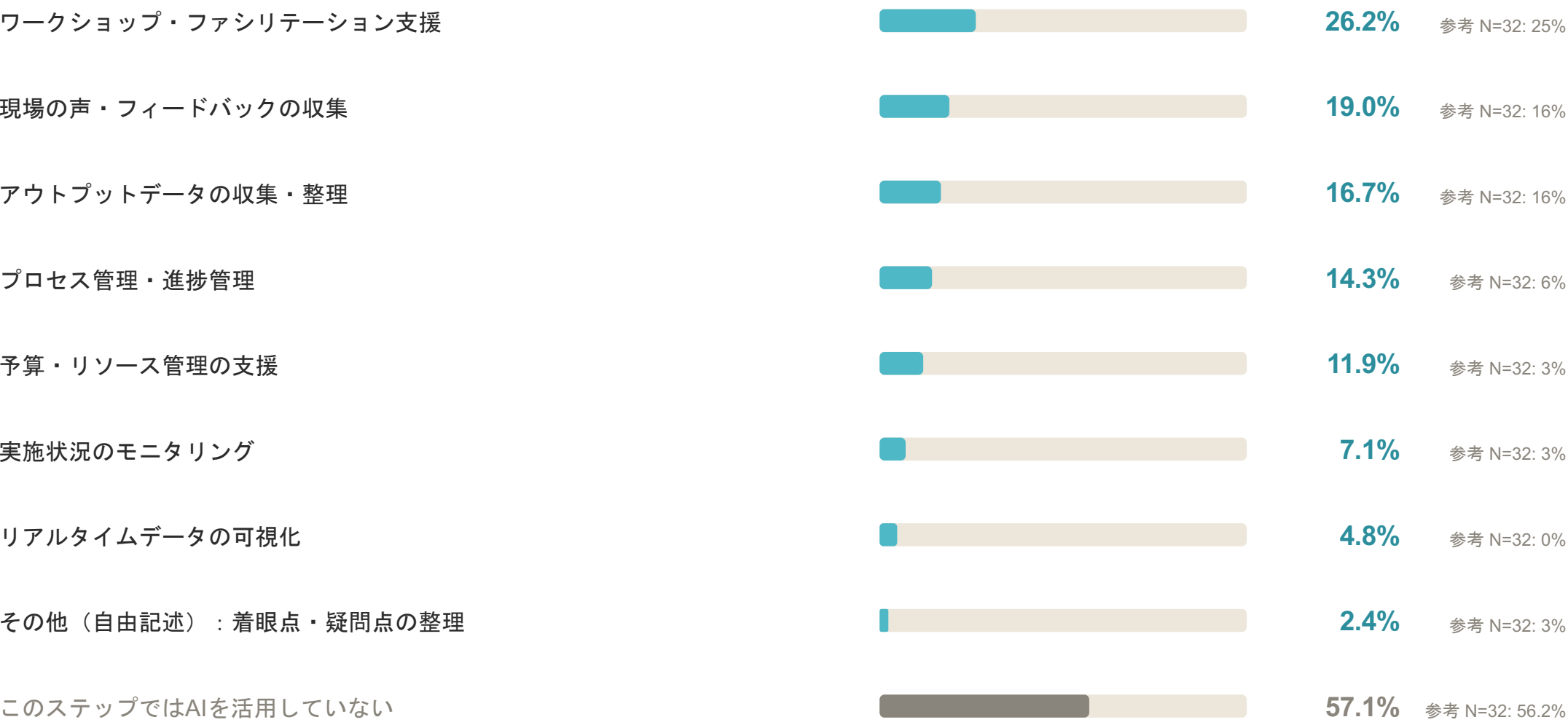
45%

のみ活用－7ステップ
で最も低い

日常運営にAIを溶け込ませる「お作法」が未開拓。次のフロンティア。

※ 注記はSTEP1参照。

活用されている内容（全選択肢・選択率降順／N=42）



データ分析

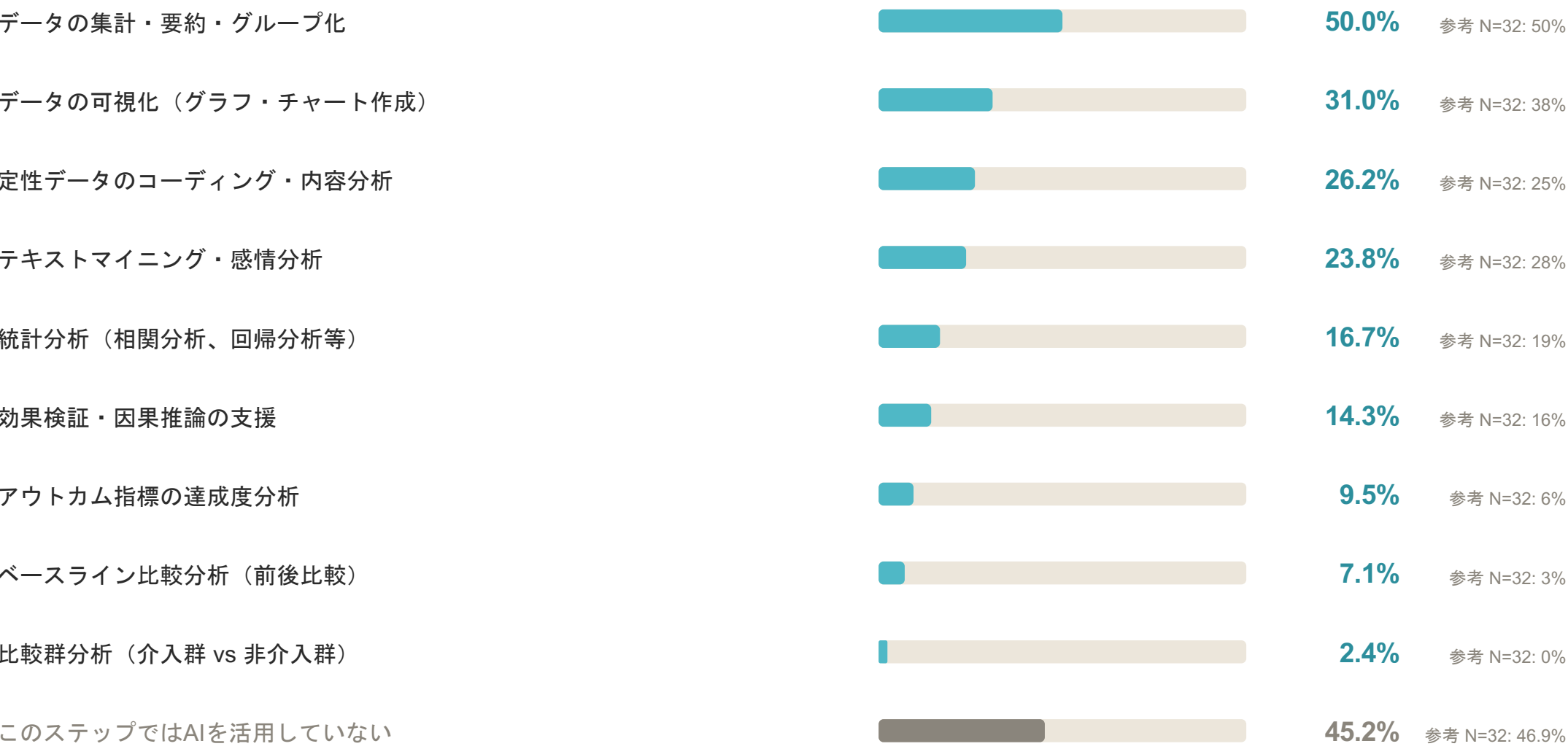
収集データを分析し、望む変化（アウトカム）が起きたかを検証する段階。

57% がこの段階で
AIを活用

統計・因果推論（14–17%）は低水準。再現性が厳密さと両立しにくい。

※ 注記はSTEP1参照。

活用されている内容（全選択肢・選択率降順／N=42）



報告・活用

結果をステークホルダーに報告し、次の改善・意思決定に活かす段階。

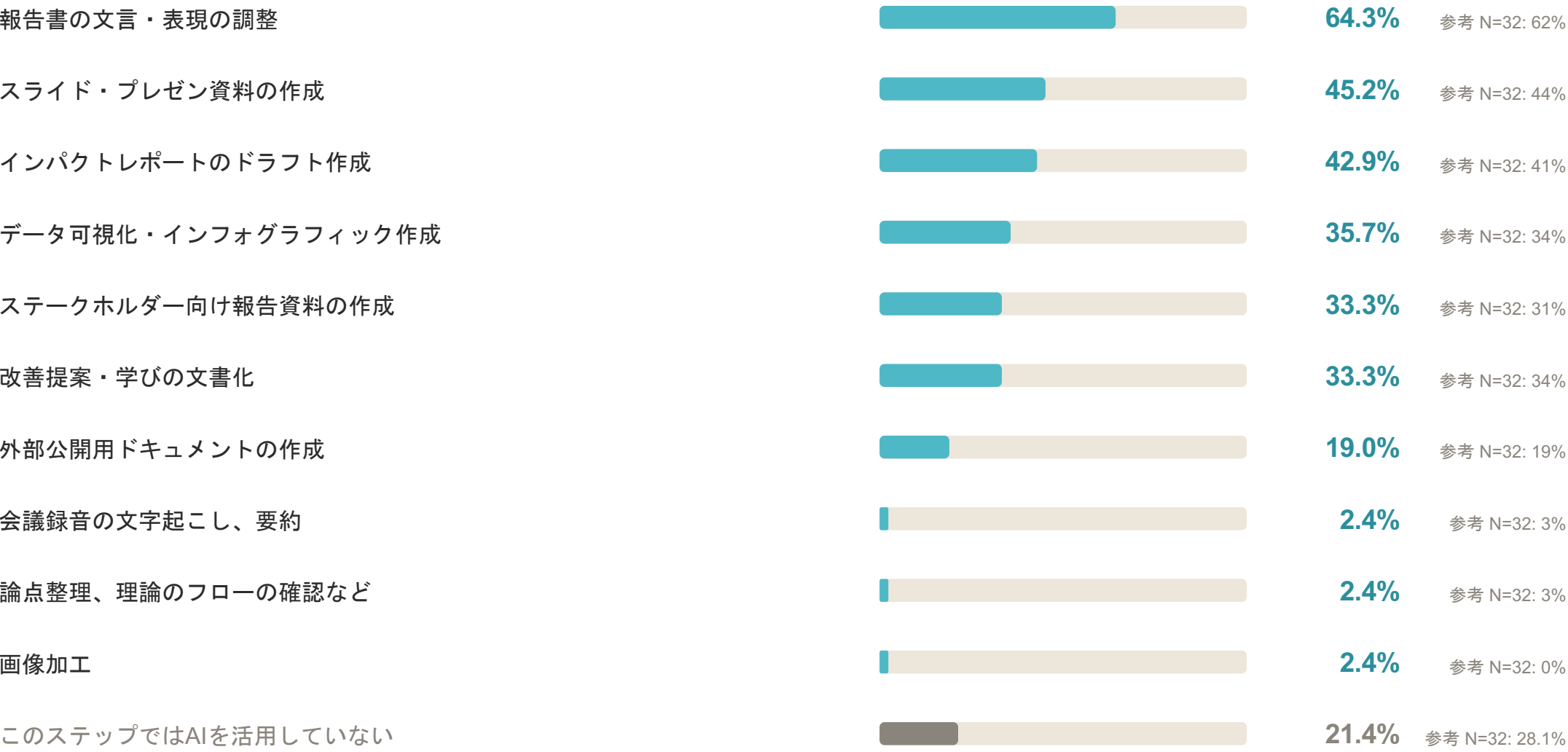
79%

がこの段階で
AIを活用

文章の「研磨」と資料化に絶大な威力。成果の対話の準備を加速。

※ 注記はSTEP1参照。

活用されている内容（全選択肢・選択率降順／N=42）



回答者属性・利用ツール 全数値（N=42）

Q1-1 所属・Q1-2 役割・Q2-1 利用状況の全カテゴリの実数と割合。括弧内は参考値としての N=32 の割合。

Q1-1 所属（単一選択・全8カテゴリ）	Q1-2 役割（複数選択・全16カテゴリ）	Q2-1 サービス別 利用状況（全6サービス）
資金提供者（財団・助成団体・投資家・金融機関・VC/PE等）	SIM/IMM推進・担当	ChatGPT
11人・26.2%（参考 N=32: 34%）	経営・マネジメント	有料版(NPO版含む) 17 (40.5%) ／ 無料版のみ 16 (38.1%) ／ 未利用 9 (21.4%)
事業者（営利企業・株式会社等）	コンサルティング・伴走支援	参考 N=32：有料 13 (40.6%) ／ 無料のみ 11 (34.4%) ／ 未利用 8 (25.0%)
7人・16.7%（参考 N=32: 12%）	評価設計・評価実務	Gemini
事業者（非営利組織・NPO/NGO・一般社団/財団等）	事業企画・新規事業	有料版(NPO版含む) 22 (52.4%) ／ 無料版のみ 8 (19.0%) ／ 未利用 12 (28.6%)
7人・16.7%（参考 N=32: 6%）	助成・伴走支援	参考 N=32：有料 14 (43.8%) ／ 無料のみ 8 (25.0%) ／ 未利用 10 (31.2%)
評価・コンサルティング・調査機関	現場事業・プログラム運営	NotebookLM
6人・14.3%（参考 N=32: 19%）	研修・人材育成	有料版(NPO版含む) 14 (33.3%) ／ 無料版のみ 11 (26.2%) ／ 未利用 17 (40.5%)
中間支援組織・支援機関	調査・リサーチ	参考 N=32：有料 8 (25.0%) ／ 無料のみ 10 (31.2%) ／ 未利用 14 (43.8%)
5人・11.9%（参考 N=32: 12%）	サステナビリティ・ESG・IR・開示	Claude
フリーランス・個人事業主	測定・指標設計	有料版(NPO版含む) 14 (33.3%) ／ 無料版のみ 8 (19.0%) ／ 未利用 20 (47.6%)
4人・9.5%（参考 N=32: 9%）	政策企画・制度設計	参考 N=32：有料 10 (31.2%) ／ 無料のみ 7 (21.9%) ／ 未利用 15 (46.9%)
行政・自治体・公的機関	投資・融資・審査	Copilot
1人・2.4%（参考 N=32: 3%）	学生・研究活動	有料版(NPO版含む) 8 (19.0%) ／ 無料版のみ 9 (21.4%) ／ 未利用 25 (59.5%)
研究・教育機関	広報	参考 N=32：有料 7 (21.9%) ／ 無料のみ 7 (21.9%) ／ 未利用 18 (56.2%)
1人・2.4%（参考 N=32: 3%）	事業サポート	Genspark
		有料版(NPO版含む) 6 (14.3%) ／ 無料版のみ 0 (0.0%) ／ 未利用 36 (85.7%)
		参考 N=32：有料 4 (12.5%) ／ 無料のみ 0 (0.0%) ／ 未利用 28 (87.5%)

出典：全設問クロス集計データ（N32 vs 追加10 vs 全体42）およびローデータ（全42件）。Nonprofits版は「有料版（Nonprofits版含む）」に統合して集計。